

館長の作家対談

半藤一利(作家・昭和史研究者)



海野十三 愛用の8ミリ映写機(「日本SF展・SFの国」出品)

収蔵品のご紹介

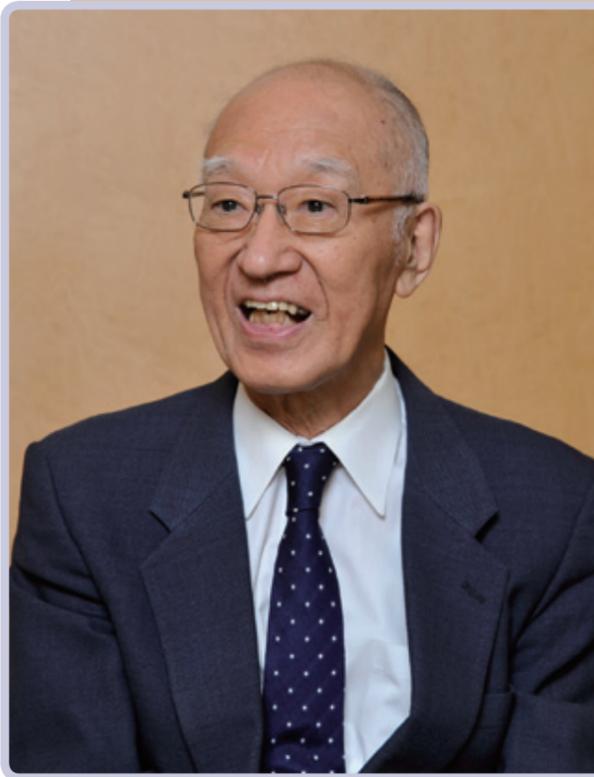
正岡子規 佐藤紅緑あて書簡 1898年4月8日

2013(平成25)年度世田谷文学館事業報告

館長の作家対談

ゲスト
半藤一利
(作家・昭和史研究者)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)



半藤一利(はんどう・かずとし)

作家・昭和史研究者。1930年、東京生まれ。東京大学文学部国文科を卒業し、文藝春秋に入社。「文藝春秋」、「週刊文春」編集部などで編集者として活躍しながら、『日本のいちばん長い日』(1965年、文藝春秋、刊行時は大宅壮一編。のち、『決定版 日本のいちばん長い日』、1995年)以来、主に日本近現代史に関する著作も手がけ、『漱石先生ぞな、もし』(1992年)で新田次郎文学賞、『ノモンハンの夏』(1998年)で山本七平賞を受賞。2006年に、『昭和史 1926-1945』(2004年)、『昭和史 戦後篇 1945-1989』(2006年)で毎日出版文化賞特別賞を受賞。他にも対談、座談、共著も含め、昭和史について数多くの著書があるが、2012年から2014年にかけて、『日露戦争史』全3巻を上梓。

『昭和史』戦前・戦後篇に続き、大著『日露戦争史』全3巻を完成された半藤一利氏をお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

『日露戦争史』の構想は漱石本の前から

館長▶『日露戦争史』3巻の完成、おめでとうございます。半藤さんのフランチャイズは「昭和」という頭が私にはあつて、一般読者にもそういう方が多いと思います。だから、「おや、半藤さんは明治に遠征されたぞ」と感じましたが、日露戦争の執筆は前から構想しておられましたか？

半藤▶ええ。前々から、たとえば統帥権とは何かなど、日露戦争を調べないと昭和史の本当のことは分からないのではないかと、いつか勘が働いていましたので、「いつか日露戦争を調べてやる」と思っていました。実は私、夏目漱石の専門家みたいにいわれています。漱石の本を7冊くらい出しているのでも人からそう思われるのですが、私は『日露戦争史』を書くにあたり、日露戦争および日露戦争後の日本を客観的に見られる脇の人物として登場させようと思つて、啄木と漱石に狙いをつけ

ました。それで久しぶりに漱石を読み出したら面白くなって、先に漱石関係の本を出しましたが、本当は日露戦争の中で書くために漱石を読み直したんです。と、いうくらい日露戦争はだいぶ前からやるつもりでいました。

館長▶大まかに遡つて何年くらい前ですか？
半藤▶文藝春秋を辞める頃には取り掛かっていましたから、20年以上前になります。『漱石先生ぞな、もし』という最初の漱石本を出したのが1992年で、その前からです。

館長▶その頃から文献資料などを集めていらしたのですか？
半藤▶集めていました。やろうと思つたきつかけ

の一つは、司馬遼太郎さんが『坂の上の雲』を書かれた頃には一番大事な資料が出されていなかったからです。陸軍も海軍も戦争の研究のため、日露戦争が終つてすぐにもすごい記録、戦史を作ります。ただ、陸軍は上から押えてしまつて、きちんとしたものにならなかった。海軍の方は一応きちんと完成させたんです。海軍は150冊の戦史を3部作つて、海軍大学校と軍令部、あと天皇

家、当時は明治天皇ですが、に差し出しまして、これが本当のすごい戦史なんです。

館長▶それは公開していなかったのですか？
半藤▶太平洋戦争で負けた時、海軍は海軍大学校と軍令部にあつた。組は燃やされてしまったんです。まったく、日本人というのは資料を燃したり破いたりするのが好きですから、燃しちゃったんですね。

館長▶残つたのは天皇家の分だけですね。
半藤▶はい。昭和天皇が亡くなる5、6年前に、これはここに置いておくよりも国民の目に多く触れた方がいいというので、天皇家が当時の防衛庁の戦史研究所に御下賜になった。それが小さく新聞に出たので、早速飛んでいきました。「見せてくれ」と言つたら、「どこを見たいですか？」つて聞くので、「全部」と言つと、「150冊ありますが」つて。これには恐れ入りました(笑)。そのくらいものすごい資料なんです。

館長▶日露戦争だけで150冊？
半藤▶日露戦争だけです。これを読んでみたら、『坂の上の雲』をはじめ、日露戦争を題材にした本に書かれていない話がどんどん出てくるわけ



『日露戦争史』第1巻(2012年)、第2巻(2013年)、第3巻(2014年)、いずれも平凡社。

す。先達の業績にケチをつけるということではなくて、これはきちんとしたのとして書き残さなくてはいけない。それじゃあひとつ、俺が日露戦争を書いてやるかと。ところが、まともに書いただけではみんなが知っているような話ばかりになるので、漱石を使おうと思ひ立ちました。

作家たちが見た日露戦争

半藤▶『日露戦争史』に取りかかった時、漱石を出

すからにはもちろん啄木も出さないといけない、ういえばあの時代には島崎藤村も生きていた、尾崎紅葉もいた、若い時代の永井荷風もいた……作家たちが日露戦争をどう迎えたのかと、だんだん拡がっていつて。そのうちにロシアの方もチェーホフやトルストイがいるし、と。

館長▶トルストイには有名な日露戦争批判論の「汝、悔い改めよ」がありますね。

半藤▶拡げていっただけでなくなつてどうしようかとも思いましたが、折角ここまで調べたからと書き出して、まさかこの歳でこんな厚いものを3冊書くことになるとは思いもしませんでした。

館長▶啄木の話が出ましたが、初めはインド哲学者の姉崎正治という日露戦争肯定派の人物の影響で戦争積極派だったようですね。それが、トルストイを読んで方向転換したとか。他にもそういう人は沢山いたでしょうね。

半藤▶すごく沢山いたと思います。啄木も最初の頃は「万歳、万歳」です。それが、後から俄然帝国主義に目覚めたというか、反対派に回ります。面白い人でした。

館長▶レーニンが日露戦争について書いていたことも全く知りませんでした。『レーニン全集』に入っているのですか？

半藤▶はい、レーニンを全部読むのは大変なので、関係のある年代あたりだけ覗いたのですが、それでも結構出てきます。ほとんど日記ですが、その時はロシアではなくスイスに居ましたので、全部残っているんですね。

館長▶僕は、フランスのアナトール・フランスが書いていたのを読んだことがありません。アナトール・フランスは日清戦争のあと三国干渉から



書きます。三国干渉はけしからんと。日露戦争でいつていることは、日本が白人のロシアに勝つた、これで白人が黄色人種を尊敬するようになること大変よろしい、と。彼はある種の博愛人道主義者で人種差別反対だし、多少社会主義的な思想もあつた。それが混然一体としてあのような批判になつたと思いますが、ヨーロッパでは少数派でしょうね。半藤▶はい、あの時、ドイツが中心となつて黄禍論が風靡してましたから。アナトール・フランスのように日本が勝つたことをむしろ喜ぶというか、これからの世界のために良いという見方をした人は少数派だと思いますね。

日露戦争後の日本の選択

館長▶日本も、こうした世界秩序の役に立つという見方、こういう思想的な後押しに報いるような戦後処理をすればよかつたのだけれど、そこが問題でしょうね。

館長▶僕がちよつと不思議に思うのは、日露戦争後、日本は陸海軍とも疲弊してあれ以上戦う力

がないわけですね。それなのに、二等国になつたから頑張らなくてはと、軍備拡張をいろいろやりますね。陸軍も師団を拡大して、海軍の艦隊も。半藤▶ものすごい拡大です。海軍も全部新鋭艦隊に直すわけですから。館長▶こういう軍備拡張的な思想と、明治末期から始まる「大正デモクラシー」という思想とのせめぎ合いみたいなことは、どうなつていたのでしょうか。半藤▶本当はそれも書かなければいけないのですが、この後を書くためには、大正という時代に入らなければならぬのですが、この時代はよく分からないところがありまして。日露戦争後を書く場合、よほどよく考えないといけないのは朝鮮併合と大逆事件についてです。これは明治に起こるわけですが。

館長▶明治43(1910)年ですね。
半藤▶このあたりのところをきちんと書くには相当丁寧に調べないとけない。それこそ日本の文学者はどう対処したかというのは、いくつかの研究はありますが、そつくり引き写すわけにもいきません。朝鮮併合に対して文学者がどう反映させたかを研究した人はあまりいませんので、これもきちんとやらなければいけないと思うと、これは大変です。そのあとにさらに大正デモクラシーが来るわけですね。

館長▶僕が気になつたのは吉野作造の有名な「民本主義」についてで、国内的には民本主義、つまり民主主義ですが、対外的には膨張主義肯定ですね。帝国主義と言つては少しきつすぎるかもしれませんが、日本が膨張していく事への否定的な目はあまりないですね。

館長▶当時のヨーロッパの先進国を見れば、膨張主義が思想的にさほど忌避されることではないという風潮がありますよ。半藤▶それでも、ヨーロッパ諸国の膨張主義はもう終りに近くなつていました。それに、国力を冷静に判断すれば有り得ない話です。ちよつどその頃、明治の終りから大正の始めにかけて、後になると石橋湛山で代表されるような小国主義という考え方も随分出ていた。そういう考え方も十分に有り得たと思います。社会主義的な考え方が背景にあるといつて敬遠されましたが、それは別に常識的に国力を見れば小国主義でしか有り得ないことは分かつたと思います。

館長▶こういうことはありませんか？ 日露戦争に勝つた、一等国になつたと、人々が大喜びしたわけですね。わあわあど在野の国民が騒ぐ。それに後押しされたというような面もあるんじゃないでしょうか。
半藤▶それはものすごいあつたと思います。あれだけの苦勞をさせて、あれだけ税金を取つて、新しい新税もうんと作つて、取り上げるだけ取り上

辻井喬＝堤清二 文化を創造する文学者



開催にあたって

辻井喬＝堤清二氏は現代日本の文化に新しい領分をひろげる活動と、詩人・小説家・評論家としての文業と二つの大道を、旺盛に生きぬいた稀有の人物でした。二つのどちらが主、どちらが従というのではなく、たとえば美術館や劇場を創設する文化活動の実務家と、約20冊におよぶ詩集、優に10冊を越える小説・評論の著作を創りだした文学者とは、氏のなかでは渾然と一体に融けあっていたのではないかと想像されます。

『叙情と闘争』と題された回顧録ふうの著作を繙いても、叙情は闘争であり闘争は叙情であったことを如実に思い知らされます。

『叙情と闘争』と題された回顧録ふうの著作を繙いても、叙情は闘争であり闘争は叙情であったことを如実に思い知らされます。セゾン文化財団の活動、「無印良品」の創業などは、闘争という言葉の示すとおり、現実社会の抵抗に対する挑戦と決断の連続だったのではないかと。ときには厳しい苦難にも出会うその戦いのなかで、個人としての精神の自由を熟視し、孤独な魂の秘密を掘りさげる時間を生みだしては、叙情の名のもとに数々の文業を積みかさねられたのではないかと。私にはそんなふうには思えてなりません。

世田谷文学館では本年の重要な事業の一環として、辻井喬＝堤清二氏の業績を顕彰し追悼する連続講演を企画しました。氏の生前、親密に交際され業績を熟知されている方々の講演は、変転を重ねた戦後社会の尖端で活動しつづけた文学・文化の創造者が何を生みだしたのか、いっそう理解を深めるまたとない機会になると信じています。

世田谷文学館
館長 菅野昭正

10月4日(土)
講師:栗津則雄(フランス文学者、評論家)
「詩人・辻井喬」

10月5日(日)
講師:松本健一(思想家)
「辻井喬＝堤清二という人間」

10月12日(日)
講師:三浦雅士(評論家)
「二つの名前を持つこと」

10月13日(月・祝)
講師:山口昭男(編集者、評論家)
「辻井喬にとっての政治と文学」

10月18日(土)
講師:小池一子(クリエイティブ・ディレクター)
「創り続けられた時間と空間」

会場:世田谷文学館1階 文学サロン

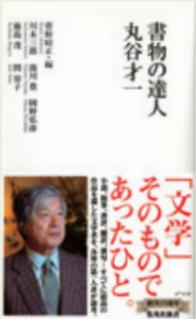
時間:14:00～15:30

定員:各回150名

参加費:各回500円

申込み:開催日の各2週間前(必着)までに往復ハガキに①講座名・開催日②参加者氏名(2人まで連名可)・住所・電話番号③返信面に代表者の氏名・住所を明記し、世田谷文学館「連続講座 辻井喬」係まで。1講座につき1通ずつ。応募者多数の場合は抽選。5講座全てをお申し込みの方は、9月20日(必着)までに全講座受講の旨を明記のうえ、1枚の往復ハガキでお申込みいただけます。

昨年度の連続講座の講演録集『書物の達人 丸谷才一』が刊行されました。(2014年6月、集英社新書)



連続講座

て、訳がわからずに亡びの方へ向かっているのではないかと。今2014年ですから、2032年まであと18年でしょうか。昭和時代を重ねると、ちょうど今が昭和二十一年の時期にあたります。館長▶ただ何となくそういう雰囲気が無くはないですね。日本の国際的な位置というの、近頃少し変わってきていますね。

半藤▶昭和史の方の話ですけど、昭和二十一年の日本を国をよく見ますと、この時の軍部でもあろうが政治であろうが中堅クラスからトップに立ちかけた人たちがみんな、日露戦争の悲惨とか戦争というものの残酷さ、それからいかに国民があの時苦しんだかということは一切知らない、体験していないわけです。栄光だけを背負っているんです。館長▶戦争を知らない子どもたちって言いますからね。

半藤▶今も同じような形でちょうど中堅クラスから上の方の人たちは太平洋戦争の悲惨も知らなければ、戦後日本を作るためのものすごい苦労

もあまり知らず、経済大国になった栄光だけを背負ってきた。ちょうど日本の権力者の境遇があの時代と似ているんです。そういうことを考えると、この40年史観というのは、いくらかインチキではあります。

館長▶歴史は繰り返さないと考えますが、ただ同じ国民ですからね。国民性というの、簡単に変わるものではないかもしれない。

半藤▶同じ民族ですし、人間は変わりませんから。歴史は繰り返しません。人間が歴史を作るので、人間が余程変わらなないと同じことをまたやります。歴史に学べというのですが、昭和二十一年の文学者はかなりきちんと国家と向き合っています。今の文学者にはもう少しこの国と向き合ってほしいと思いますけどね。

館長▶文学そのものがミラリズムというか、本当に身の回りの小さなことに成り変わってしまった。それは世界的な傾向ではないかと思えます。半藤▶世界的傾向ですか？

いかな言葉なので使いたくないのですが一応庶民と言いますと、庶民はまとまった形の日本国民ではなかったと思うんです。明治維新から40年近く経っている頃ですから、国家というものを相当意識していたとは思いますが、それでもまだそれほど国家の国民だという観念はなかったのではないかと。ですからこれは「民草」が一番良いんじゃないかと、わざと使っています。

館長▶それはよくわかりました。苦心の選択。半藤▶苦心の選択というより、どうなんだろうなと。私たちは、今はすぐ「国民」だとか使いますが、日本国民という意識がどのくらいあるものかと。ですから、「国民」というのも買いかぶりすぎるし、といって「大衆」というのも……。何とか良い言葉ないかと思いましたが、もういいや、民草で通しちゃおうと。

40年で繰り返される国家の盛衰

半藤▶これは私の勝手な史観なのですが、「40年史観」というのを唱えています。「昭和史」の中でも書いていますが、明治維新そのものの年ではなく、私が数えるのは慶応元年からです。なぜかというと、慶応元年に日本の国策は攘夷ではなく開国にすること、これを朝廷が決めるからです。朝廷がそれまでの尊皇攘夷から、これはやむを得ないと、江戸幕府が決めた開国案を朝廷が呑むわけです。国家がこれからは開国すると決めたのが慶応元年、1865年です。それから明治維新が起きますが、1865年から数えてちょうど40年目が日露戦争の終った年、1905年です。ですから、この40年間の間に日本は近代国家というものを一生懸命に作ってきた。それで一応成功して、先ほどの話のように一等国になった。それから一等国だとい気になって、40年経ったらこの国を亡ぼしてしまつたということです。その



誰かいないと時代というものがはつきり形作れないですね。

半藤▶一般の国民も、文学者に人間や社会の見方を教えてもらうというのはおかしいですけど、信じて読むという人がいなくなりましたね。

館長▶よく知識人の没落とか消滅とかいいますが、一般に知識人というものも信頼しなくなつたのかな。大きな思想で、現在過去・未来を見渡して思想的な大海を作るような知識人というのはフランスでもアメリカでも見かけなくなりました。

半藤▶フランスやアメリカでもそうですか。では、あんまり日本の文学者のことばかり責めてもしょうがないですね(笑)。

館長▶やはり、日本の文学者にはもつと奮起してほしいですけど(笑)。本日は貴重なお話をありがとうございました。

(2014年5月2日世田谷文学館館長室にて)

あとの占領期間は入れません。館長▶サンフランシスコ講和条約までですね。半藤▶講和条約までです。日本がもう一回主権を取り戻して、戦後国家としての日本を作り出したのが昭和27年、1952年です。それから戦後日本を廃墟から作り直して、とにかく国民総生産GNPが世界の1位だか2位になるまでの大国家を作った途端にバブルが弾けたのが1992年なんです。

館長▶そこまで高度経済成長の時代ですね。半藤▶1992年にバブルが弾ける、1952年からまた40年です。ですから国を作るのにも40年、亡ぼすにも40年かかった。それからまた亡びた国をもう一回作り直すのにも40年かかって、そしてまた始まつたんです、亡びの40年。とすると、1992年から亡びの40年が始まり、2032年がまことに、あの……(苦笑)

館長▶とても面白いですね。半藤▶勘定が合つてしまうものですから。館長▶こういう浮き沈みは確かにありますね。半藤▶ですから、日露戦争までの日本というものをよく考えると、一番いいのは司馬さんの『坂の上の雲』という題名ですが、戦後の日本人と同じように、あの時代は「坂の上の雲」にある一つの理想を描いて、とにかく駆け上がった。解決しなければならぬ問題が沢山あつたにも関わらず、そんなことは後回しで駆け上がった一等国を作ってしまった。同じように戦後日本も何とかこの国を再生させて繁栄した国にしなければいけないと、一瞬に見えた「坂の上の雲」を求めて、確かに経済大国を作ります。でも、その間に解決しておかなければならぬ問題、例えば環境の問題とか、人権の問題とか、差別の問題とか沢山あつたけれど、あと回し、あと回しでとにかく経済大国を作つた。ちょうど同じです、日露戦争の時と。それでいい気になって、またバタツとおかしくなつ

民草か国民か

館長▶『日露戦争史』で「民草」という言葉を使つておられますが、あれは意識的ですか？

半藤▶「国民」というものに日本人はまだなつていなかったと思いましたが、「大衆」という言葉は社会主義的に聞こえてくるし、といって「民衆」も何となしに違う。つまり、明治時代の私達庶民は……私、実を言うと「庶民」の「庶」というのは嫌

2013(平成25)年度事業一覧

1. 展覧会

展覧会名	会期	日数	一般観覧料(円)	観覧者数(人)
コレクション展 (平成24年度からの継続)「文学に描かれた世田谷 世田谷の詩歌と山本健吉」	4/1～4/7	7日	200円	27,825
前期「文学に描かれた世田谷 成城・多摩川界隈」	4/20～9/23	135日		
後期「旅についての断章」	10/5～4/6	140日		
企画展 「上を向いて歩こう」展	4/20～6/30	62日	700円	7,186
「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心」展	7/13～9/16	57日	800円	13,666
「幸田文展」	10/5～12/8	56日	700円	9,340
「第33回世田谷の書展」	1/7～1/22	13日	無料	1,331
「星を賣る店 クラフト・エヴィング商会のおかしな展覧会」	1/25～3/30	56日	700円	15,245
展覧会観覧者数合計				46,768

2-1. イベント:企画展関連

開催日	内容	参加者数(人)
「上を向いて歩こう」展開連イベント		
4/27	トークショー「マッシー村上と「上を向いて歩こう」 出演:村上雅則(野球解説者・日本人初のメジャーリーガー)、佐藤剛(ノンフィクション)「上を向いて歩こう」(著者)	36
5/5	FM世田谷特別番組公開録音イベント「上を向いて歩こう」が生まれた時 出演:永六輔(放送タレント)	145
5/18	トーク&映画上映会1「青春を贈ける」 出演:佐藤利明(娯楽映画研究者)、佐藤剛	60
5/26	トーク&映画上映会2「上を向いて歩こう」 出演:浜田光夫(俳優)、佐藤利明	69
6/15	「SUKIYAKI 50 Janniversary」子ども×おとな×ロック×SUKIYAKI」セッション!!! 出演:三宅伸治(ミュージシャン)、佐藤剛	173
「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心」展開連イベント		
7/13	記念講演会「祖父・清六から聞いた兄・賢治」 講師:宮沢和樹(林風舎代表)	122
7/20、7/21	子どもレセプション 展示見学会ツアー サイン会:東逸子「銀座鉄道の夜」、片山健「狼森と狐森、盗森」、川上和生「やまなし」、松成真理子「蛙のゴム靴」、ささめゆき「よだかの星」、竹内通雅「月夜のでんしんばしら」、名倉靖博「セロ弾きのゴーシュ」、堀川理万子「氷河鼠の毛皮」	410
7/23	おはなしフェスティバル 出演:学校図書ボランティアin世田谷	43
7/24	おはなしフェスティバル 出演:おはなしステップ	85
7/25	おはなしフェスティバル 出演:おはなし泉	93
7/26	おはなしフェスティバル 出演:おはなし広場	86
7/30	おはなしフェスティバル 出演:おはなし待夢	204
7/31	おはなしフェスティバル 出演:おはなしポケット、おはなし星の子	100
8/1	おはなしフェスティバル 出演:紙芝居仲間	70
8/2	おはなしフェスティバル 出演:太子堂おはなしの森、ありのママ	74
8/17、8/18、8/24、8/25、8/31	絵本作家によるトーク&サイン会 出演:矢吹申彦、伊勢英子、小林敏也、司修、ささめゆき	319
9/8	絵本学会との共催絵本研究会「宮沢賢治原作の絵本について」 講師:金井一郎(アーティスト)、松田素子(編集者)、司会進行:笹本純(筑波大学教授)	119
「幸田文展」関連イベント		
10/13	映画上映会+トーク 出演:小川三夫(宮大工)	147
10/27	講演「(男)が語る幸田文」 出演:松村友祝(作家)、堀江敏幸(作家)	182
11/9	朗読会「幸田文をよむ」声を楽しむ朗読会 出演:声を楽しむ朗読会(代表:大谷紀幸)、解説:福島勝則(多摩美術大学教授)	113
11/23	講演「崩れる大地と生きること」 出演:青木宗緒(幸田文孫・作家)、田端茂清(エッセイスト・農学博士・元建設省砂防部長)	202
12/1	講演「(女)が語る幸田文」 出演:青木玉(幸田文長女・作家)、森まゆみ(作家)	214
「第33回世田谷の書展」関連イベント		
1/10、1/11、1/12、1/13、1/15	鑑賞講座(5回) 講師:節田久子(日展会員)、池亀壽典(読書書法会理事)、泉原壽康(日展会員)、後藤俊秋(毎日書道展審査員)、稲村龍谷(日展会友)	361
「星を賣る店 クラフト・エヴィング商会のおかしな展覧会」関連イベント		
2/9	おかしなトークショーその1 出演:岸本佐知子(翻訳家)、古屋美登里(翻訳家)、クラフト・エヴィング商会(吉田浩美・吉田篤弘)	156

3. ライブラリー・講義室・絵本コーナー等

施設	利用者数(人)
ライブラリー	7,324
講義室	3,043
絵本コーナー	12,441

4. 移動文学館

内容	参加者数(人)
区内小中学校 区民センターほか 展示	28,761(29ヶ所)
区内小中学校 ワークショップ	799

5. 文学資料収集・保管

新規寄贈	1,139点
平成26年3/31現在の収蔵品点数	95,498点
特別観覧件数(撮影点数)	72点

2-2. イベント:子ども文学館

開催日	内容	参加者数(人)
4/20	2013☆シリーズ「せたがやフシギ発見シリーズ―成城さんぽ」	10
5/18	2013☆シリーズ「せたがやフシギ発見シリーズ―アールさんぽ」	20
5/31	「歯固めの日に」家族でチューインガムをつくらう! 講師:ロッツ中央研究所研究員	35
6/30	「子ども文学さんぽ」2013☆☆☆コース第1回 リーダー:須藤正男(森林インストラクター・CONE指導者)	30
7/13～9/16	「ジュブナイルSFの世界展」	4,151
7/13～9/16	夏休み「わくわくどきどき広場」	6,976
7/13～9/23	コレクション展「子ども向けワークシート」	381
7/28	葛飾区中央図書館「北の森 ノースウッズの世界」講演会 講師:大竹英洋(写真家)	100
7/30	「子ども文学さんぽ」2013☆☆☆コース第2回「みんなが知らない高尾山」	26
8/1～9/1	ジュニア書店「大人たちに捧げる、夏休み課題図書」	598
8/6～8/8	ことのははくぶつかん「ことばとびじゅつ」ワークショップ 講師:こべんなな(アーティスト)	60
8/10	「子ども文学さんぽ」2013☆☆☆コース第3回「賢治の食卓―宮沢賢治展」	20
8/22	子どもための読み聞かせ「お話の森」in 文学館 出演:小林顕作(俳優・脚本家・演出家)	178
9/8	「子ども文学さんぽ」☆☆☆コース「石ッコンさん、宮沢賢治の石拾いさんぽ」	17
9/28	ことのははくぶつかん「ことばのことば 1」 講師:石津ちひろ(詩人)	20
10/6	「子ども文学さんぽ」☆☆☆コース 子ども百名山シリーズ「天覧山」	15
10/18	祖師谷小学校「赤毛のアン」ブックトーク	226
10/20	「子ども文学さんぽ」☆コース「せたがやフシギ発見シリーズ」サザエさんの桜新町さんぽ」	10
11/3	「子ども文学さんぽ」幸田文展「特別な木」に会いに行こう! 18 リーダー:須藤正男(森林インストラクター・CONE指導者)	18
11/17	「子ども文学さんぽ」2013☆☆☆コース「せたがやフシギ発見シリーズ」烏山寺町さんぽ」	10
11/24	ことのははくぶつかん「ことばとしぐさ」 講師:林家さく麿(落語家)	22
11/16	高津区子育てフェア「北の森 ノースウッズの世界」講演会 講師:大竹英洋(写真家)	150
12/15	ことのははくぶつかん「ことばとからだ」 講師:もび(西井夕紀子主宰・もちはこびパフォーマンスグループ)	19
12/10、12/11、12/14	芦花小学校ワークショップ①②③「大竹さんと写真を撮ろう」 講師:大竹英洋(写真家)	329

6. 世田谷文学賞

募集部門	詩	短歌	俳句	川柳	随筆	合計
応募点数	94	1,533	579	210	65	2,481点
入選者数	16	16	19	19	4	74人

7. 刊行物

タイトル	判型/頁数	頒価(円)
世田谷文学館ニュース		
第54号4月(館長の作家対談:加藤幸子/当館収蔵品のご紹介:會津八一「学規」と小林正樹)	A4/8	無料
第55号8月(館長の作家対談:鹿島田真希/当館収蔵品のご紹介:恩地幸四郎(「氷島」の著者(萩原朔太郎像))	A4/12	無料
第56号12月(館長の作家対談:佐佐木幸綱/当館収蔵品のご紹介:田辺和雄「山日記」)	A4/8	無料
図録等		
「上を向いて歩こう」展	22cm角変形/64	1,000
「幸田文展」	A5/112	1,200

2-3. イベント:講演会等

実施日	内容	参加者数(人)
1/12	ことのははくぶつかん「ことばのことば 2」 講師:天野慶(歌人)	22
2/23	「どきどき・わくわくをポスターにデザインしよう!」 講師:秋澤一彰(グラフィックデザイナー)	22
3/2	「日本SF展・SFの国」プレイベント「ライントレース ロボット工作教室」 講師:佐々原康(東京エレクトロン 東北株式会社)	15
3/30	「読んで創ってブガクしよう!もしかしたら大作家!」 講師:梨屋アリエ(作家)	27
2-3. イベント:講演会等		
6/22	連続講座「書物の達人 丸谷才一」 「昭和史のなかの丸谷才一」 講師:川本三郎(評論家)	197
6/23	連続講座「書物の達人 丸谷才一」 講師:菅野昭正(世田谷文学館館長)に変更	125
6/29	連続講座「書物の達人 丸谷才一」 「伏魔・俳諧・花柳」 講師:岡野弘彦(歌人・國學院大學名誉教授)	184
6/30	連続講座「書物の達人 丸谷才一」 「官能的なものへの寛容な知識人」 講師:鹿島茂(仏文学者・明治大学教授)	192
7/6	連続講座「書物の達人 丸谷才一」 「「忠臣蔵とは何か」について」 講師:関谷子(エッセイスト)	162
7/27	星新一賞創設記念講演会「宇宙のひみつ」 講師:坂下哲也(宇宙航空研究開発機構 広報部報道グループ長)	71
7/27	星新一賞創設記念ワークショップ「小さな物語の作り方」 講師:江坂遊(作家)	36
7/28	星新一賞創設記念講演会「宇宙のひみつ」 講師:阪本成一(宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所教授)	86
7/28	星新一賞創設記念ワークショップ「小さな物語の作り方」 講師:江坂遊(作家)	36
8/4	日本SF展プレトーク「日本SF作家と初期アニメの関わり」 講師:豊田有恒(作家)	81
12/14	コレクション展開連イベント「私の本棚」 出演:大竹英洋(写真家)	28
2/8	コレクション展開連イベント「私の本棚」 出演:森本剛史(鳥屋書店旅行コンシェルジュ)	5
3/21	「世田谷文学賞」表彰式	88

2-4. イベント:他団体との共催事業等

実施日	内容	参加者数(人)
4/27	子ども読書の日記念事業 「工藤直子講演会」 共催:世田谷区教育委員会	124
7/23～7/31～8/2	中学生職場体験「バチ職場体験」 共催:世田谷区教育委員会	22
8/6～8/11	博物館学芸員実習	6
9月、9月、1月	中学生職場体験 共催:世田谷区教育委員会	38
11/16、11/17	多摩美術大学との共同研究「清水邦夫の劇世界を探る」第3弾「楽屋」	118
1/23、1/28、1/30、2/6	その他職場体験	4
1/28	社会科見学 総合学習「文学館を紹介しよう」	2
通年	文学館友の会との共催 文学講座、文学散歩など26回実施	737
通年	文学活動を中心とする区内活動団体の講座等を支援し、区民の生涯学習の要請に応えた。区民講座・シニアスクール等への企画展に関するレクチャーなどを、延べ21団体に実施した。	790

8. 年間総利用者数 ※一部イベント参加者は含まず

	138,209人
--	----------

展覧会 フライヤー



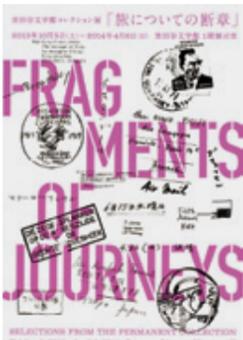
「幸田文展」



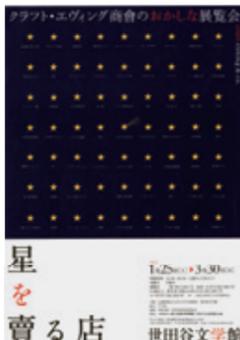
「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心」展



「上を向いて歩こう」展



コレクション展「旅についての断章」



「星を賣る店 クラフト・エヴィング商会のおかしな展覧会」



「世田谷の書展」

平成25年度の企画展は、利用者の多様なニーズに対応し、また当館の企画展の特色でもあるジャンルを横断する展覧会として、春に歌をテーマにした「上を向いて歩こう」展、冬には装幀、デザイン、小説と多面的に活躍するユニットによる企画展「星を賣る店」クラフト・エヴィング商会のおかしな展覧会を開催し、夏には子どもや家族で楽しむことのできる「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心」展を開催。秋は、開館以来取り組んできた、すぐれた文学の魅力を真正面から紹介する展覧会として「幸田文」展を開催した。

「上を向いて歩こう」展は、世界の音楽史に残る「上を向いて歩こう」が、人々の心をゆさぶり、日本人にとっ

2013(平成25)年度 世田谷文学館事業報告

の秘密に迫る展覧会であった。この展覧会は、一つの歌にスポットを当て、多角的に迫る、独創的な展示で新たな利用者の開拓に貢献した。

「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心」展は、東日本大震災以降注目を集める宮沢賢治の、童話を題材とした絵本、挿絵約2500点を展示した。夏休み期間中の開催で、子どもたちや家族連れでの来館も多かった。

「幸田文展」は、自らの体験に材を取った『流れる』おとうと、70歳を超えて全国の樹木や山崩れの現場を訪ね歩いた『木』崩れなど特異な文学世界を築いた幸田文の初の本格的な展覧会として幸田文ファンへの期待にも応え、終盤にかけ多くの来場者があった。

「星を賣る店 クラフト・エヴィング商会のおかしな展覧会」は、吉田篤弘と吉田浩美によるユニットの、これまでの活動を総括する内容で、クラフト・エヴィング商会という架空のセレクト・ショップがこれまでに仕入れた商品制作してきた作品を「棚卸しするというスタイル

をとった展覧会。ユニークな発想と展示空間が大きな反響を呼び、熱心なファンが全国から詰めかけた。世田谷文学館での開催となってからもお正月の恒例として固定ファンが多い「世田谷の書展」は第33回を迎え、区内在住の流派を超えた書迷を代表する書家により「世田谷ゆかりの作家たち」をテーマに開催、書の観かたがよくわかる鑑賞講座も毎回盛況であった。

「コレクション展」の前期「文学に描かれた世田谷 成城・多摩川界隈」は地域の作家と作品を紹介。後期「旅についての断章」は「旅」という視点から収蔵品を紹介する手法が関心を惹き、多数の入場者があった。

教育普及事業では、子どもを対象とした「せたがや子ども文学館」、一般区民を対象とした講演会事業ほか、市民活動の支援事業や世田谷区教育委員会との共催事業を実施。

イベント フライヤー



星新一賞創設記念「宇宙のヒミツと物語のつくり方をまなぼう。」(星新一賞実行委員会と共催)



日本SF展プレトーク



連続講座「書物の達人 丸谷才一」

それ通年で実施した。世界の名作文学や寺山修司、北杜夫らの作品を紹介する出張展示「移動文学館」は区内小・中学校と区民センターなどで開催。今年度は文化庁の助成事業で、宮沢賢治の出張展示セットを新たに制作した。

菅野昭正館長プロジェクトによる連続講座「書物の達人 丸谷才一」を開催。講演録は2014年6月に集英社から刊行された。

通年にわたり無料で利用できるライブラリーと絵本コーナーは展覧会やイベント来場者の利用のみならず、近隣住民のリピーターも多く、地域の憩いや寛ぎにも貢献している。1階のショップも、展覧会、事業ごとの品揃え、展開の工夫により来館者の楽しみの一つとなり、賑わっている。



「清水邦夫の劇世界を探る」第3弾「楽屋」(多摩美術大学との共同研究)



「読んで創ってブガクしよう!もしかしたら大作家!？」



ことのははくぶつかん2013



コレクション展後期「旅についての断章」



コレクション展前期「文学に描かれた世田谷 成城・多摩川界限」

コレクション展 展示風景



展覧会図録「幸田文展」



展覧会図録「上を向いて歩こう展」

展覧会図録・刊行物



「幸田文展」関連イベント 11月23日 対談「崩れる大地と生きること」



連続講座「書物の達人 丸谷オー」6月23日

展覧会関連イベント・一般向けイベント



「子ども文学さんぽ 2013 ★コース」



「子ども文学さんぽ 2013 ★★★コース」



「ことのははくぶつかん 2013」

「子ども文学館」活動報告書



刊行物「文芸せたがや」第32号



7月30日 子ども文学さんぽ「みんなが知らない高尾山」



12月11日 「芦花小学校ワークショップ 大竹さんと写真を撮ろう」2日目 蘆花恒春園にて



12月15日 ことのははくぶつかん「ことばとからだ」



2月23日 ワークショップ「どきどき・わくわくをポスターにデザインしよう」

子ども文学館 活動記録



「没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙—雨ニモマケズの心」展



「上を向いて歩こう展」

企画展 展示風景



「星を賣る店 クラフト・エヴィング商會のおかしな展覧会」
撮影：椎木静寧



「幸田文展」



「第33回 世田谷の書展」

企画展



日本SF展・SFの国

2014年7月19日(土)
～9月28日(日)

2階展示室

観覧料:
一般800(640)円
65歳以上・大学・高校生600(480)円
障害者400(320)円
中学生以下無料
*()内は20名以上の団体割引

水上勉のハローワーク 「働くことと生きること」

2014年10月18日(土)
～12月21日(日)

2階展示室

観覧料:
一般700(560)円
65歳以上・大学生500(400)円
障害者350(280)円
高校生以下無料
*()内は20名以上の団体割引



『働くことと生きること』と「なりわいの記 職業紹介所の話」原稿

企画展	日本SF展・SFの国 ～9月28日(日)	水上勉のハローワーク 働くことと生きること 10月18日(土)～12月21日(日)
8月	9月	10月
コレクション展	人生の岐路に立つあなたへ ～10月5日(日)	下北沢クロニクル 10月18日(土)～2015年4月5日(日)予定

コレクション展

「人生の岐路に立つあなたへ」
10月5日(日)まで



「下北沢クロニクル」
10月18日(土)～2015年4月5日(日)予定
1階展示室

観覧料:一般200(160)円 高校・大学生150(120)円
小中学生100(80)円 65歳以上・障害者100(80)円
*中学生以下は土・祝・日は無料 *()内は20名以上の団体料金

休館日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし展覧会入場は17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳鳥山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団
世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM
〒157-0062 東京都世田谷区南鳥山1-10-10
Tel.03-5374-9111 Fax.03-5374-9120
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel.03-3415-6011]
- 松本瑠樹コレクション ユートピアを求めて
ポスターに見るロシア・アヴァンギャルドと
ソヴィエト・モダニズム
9月30日(火)～11月24日(月・休)



グスタフ・クルーツィス
《5月1日は国際的な
プロレタリア連帯の
日だ》1930年、
Ruki Matsumoto
Collection Board

- ミュージアム コレクションⅡ
- 塩田コレクション 北大路魯山人展
9月28日(日)～12月21日(日)



北大路魯山人《雲錦大鉢》1940年

- 世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館 [Tel.03-5450-9581]
- 向井潤吉 異国の空の下で
8月9日(土)～12月7日(日)
- 世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー [Tel.03-3416-1202]
- 清川泰次一色との対話
8月9日(土)～12月7日(日)
- 世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館 [Tel.03-5483-3836]
- 開館10周年 宮本三郎の仕事
1940's-1950's
従軍体験と戦後の再出発
8月9日(土)～12月7日(日)

- 世田谷文化生活情報センター 世田谷パブリックシアター [Tel.03-5432-1526]

- 『炎 アンサンディ』
作:ワジディ・ムワド
翻訳:藤井慎太郎
演出:上村聡史
出演:麻実れい、栗田桃子、
小柳友、中村彰男、
那須佐代子、中嶋しゅう、
岡本健一
9月28日(日)～
10月15日(水)
シアタートラム
パフォーミングアーツ



麻実れい

- 舞台芸術としての狂言 『狂言劇場 その八』
出演:野村万作、野村萬斎、石田幸雄
ほか万作の会
11月1日(土)～8日(土)
世田谷パブリックシアター

- 世田谷文化生活情報センター 生活工房 [Tel.03-5432-1543]

- 世田谷民話 グラフィック展
7月18日(金)～
8月31日(日)
生活工房ギャラリー
デザイン:菊地敦己



- 世田谷 アートリマ vol.22
9月20日(土)・21日(日)
- 世田谷文化生活情報センター 音楽事業部 [Tel.03-5432-1535]
- 宮川彬良のせたがや音楽研究所 #2

- 出演:宮川彬良(作曲家・舞台音楽家)、
池田理代子(劇作家・声楽家)、
INSPi(アカペラ・ヴォーカルグループ)
10月19日(日)17時開演
世田谷パブリックシアター



宮川彬良

- ピアノ・トリオの楽しみ
出演:
甲斐摩耶(ヴァイオリン)、
海野幹雄(チェロ)、
海野春絵(ピアノ)
11月29日(土)14時開演
成城ホール